

第16回全国高等学校情報教育研究会 全国大会(東京大会)の報告

1. はじめに

8月9日(水)、10日(木)の2日間、第16回全国高等学校情報教育研究会¹⁾全国大会(東京大会)が、工学院大学新宿キャンパスを会場に開催された。

4年ぶりのリアル開催となる本大会には、8月10日時点で、昨年より100名ほど多い562名の参加者があり(主催者発表)、非常に活気ある大会となった。

2. 大会概要

【テーマ】情報科の挑戦～授業実践と大学入試～

【期日】令和5年8月9日(水)から10日(木)まで

【会場】工学院大学 新宿キャンパス

【主催】全国高等学校情報教育研究会

【共催】東京都高等学校情報教育研究会、工学院大学

【後援】文部科学省、東京都教育委員会 他

【大会 URL】<https://www.zenkojoken.jp/16tokyo/>

【プログラム】

○8月9日(水)

10:20～ 開会行事(開会挨拶他)

10:40～ ライトニングトーク

11:20～ 基調講演

講演者：堀田 龍也 氏

東北大学大学院 情報科学研究科 教授

東京学芸大学大学院 教育学研究科 教授

演題：「情報教育の今日的な役割と課題」

12:20～ 休憩

13:30～ 分科会(セッション1・2)

3会場に分かれ2件ずつ実施

1件につき発表20分 質疑応答5分

14:30～ ポスターセッション／企業展示

15:30～ 分科会(セッション3・4)

○8月10日(木)

9:00～ 分科会(セッション5・6)

10:00～ ポスターセッション／企業展示

11:00～ 分科会(セッション7・8)

12:00～ 休憩

13:00～ 分科会(セッション9・10)

14:15～ 講演

講演者：田崎 丈晴 氏

国立教育政策研究所 教育課程研究センター
研究開発部 教育課程調査官

演題：「情報科における学びの充実に向けて」

15:30～ 閉会行事

3. 大会の様子

(1) ライトニングトーク

オンライン大会が続き、4年ぶりとなったライトニングトーク。分科会発表の内容について、一人当たり1分という短い時間でプレゼンテーションが行われた。機器の接続も時間に含まれるため、それぞれが工夫を凝らし、情報科らしい発表が行われた。

(2) 基調講演

情報教育の第一人者である堀田龍也氏の講演は、とても内容の濃いものであった。「学ぶ時の情報収集や整理など、情報活用能力のライトな部分はすべての教科等で行うが、高校ではやや専門的な情報学に近いことを理解する必要がある。大学入学共通テストにも入り、今は情報教育の歴史の中でも最も追い風の時期だと思う。」と講演を始められた。そして、SNSを例に「情報モラルは技術のことがわからなければその影響がわからない。情報技術の内容を教え、生徒たちが体験的に身につけたものを体系化するのが高校の情報の大きな役割。」とお話しになった。

その後、4つの話題に沿って講演を進められた。内容の一部ではあるが、講演の要点を紹介する。

① 学びに対する大きな変化

- ・ 急激な人口減少の中、豊かさを保つためにはロボットやプログラミングでやらざるを得ない。高校情報の必修はそういう大きなミッションを背負っていることを高校生に伝えていただきたい。
- ・ 変化が激しい時代の学び方として、動画やWebで学ぶことが学習体験・学習スキルとして身につけていなければならない。こういう時代に生きていく基礎体力をつける意味でも非常に重要。

- ・ これからの時代に大事なものは学力よりも少し広い資質・能力。学ぶ気持ち、学ぶスキル、学び続けられる力が最終的には学びの成果を決める。

② GIGA スクール構想による学びの変化

- ・ 進学率が非常に上がり、教育機関が多様性を受け入れるような仕組みになってないといけない。生徒一人一人に一人の先生が全て合わせるのは難しい。個別最適の学びは、端末が子供にないと無理。
- ・ クラウドの共有機能が他者の学習プロセスを見ることは「他者参照」と学術的にもよく言われる。今までは完成物だけが評価された。これからは学びに向かう力が重要で、学び方のプロセスを他者参照、途中参照できることがこれを支えている。これがクラウド時代の学び。

③ 情報活用能力の意義の再認識

- ・ 自分で教科書を整理したり、動画から大事なことを箇条書きにしたりする学び方につながる経験を、体験的に学んでもらうのが主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善。授業過程ではなく学習課程。一人一人学習過程は違う。
- ・ 学習過程を本人が自覚して本人が決めるのが自己調整学習。変化の激しい時代に重要。
- ・ 学びの変革とは、つまり授業の変革。学びの主語を子供にすること。
- ・ これからは情報活用能力がないと学びが豊かにならない。各教科の学びのついでに身につけるのではなく、各教科の学びの前提に情報活用能力が位置づいている。だから小中高校とずっと各教科等横断的にこれをやることになっている。

④ 現状における課題

- ・ 高校の情報科教員の不足、研修の受講、臨時免許、免許外担当などに課題がある。

講演の最後は、中教審のデジタル学習基盤特別委員会のことを取り上げられ、「これからは、端末などはデジタルの学習基盤。これらを使っていくことが教育指導の充実に関係するという枠組みで議論が始まっている。注目してほしい。」と締めくくられた。

(3) 分科会発表

2日にわたり3会場で30件の発表が行われた。発表の厳密な分類は難しいが、プログラミングに関連する発表が7件と一番多かった。次に多かったのはデータの活用に関連する発表で5件あった。

発表者の許可が得られた発表については、大会サ

イトで動画が公開されている。コロナ禍のオンライン開催の経験が生かされた、ありがたい対応である。

(4) ポスターセッション／企業展示

20件のポスターセッションと23社の企業展示が広い会場で行われ、人気のポスターの前にはかなりの人が集まっていた。分科会発表のように動画はないが、発表要旨は大会サイトに掲載されている。

(5) 講演

田崎丈晴氏の講演では、はじめに、久しぶりに対面開催できた喜びに拍手をしようと参加者に呼びかけられ、大会で得た成果を2学期に試行錯誤し、その結果をまた発表してほしいと話された。

講演内容は多岐に渡るものであったが、「生徒ができるようになるか、生徒がどのように学ぶかという観点で言及していただいた発表が非常に良かった。生徒が主語という趣旨が伝わっている。学習指導要領が着実に実施されているということが大いに感じた。」とお話になった。

その後、GIGAスクール、生成AI、リーディングDXスクール事業、観点別評価などにも触れられ、最後は、これからの授業を「つくる」を続け、事例は発表して共有してほしい。とまとめられた。

なお、講演資料には、情報科のオンライン学習会や情報Iの解説動画などのリンクもまとめられているので参照してほしい。

4. 大会資料について

講演や分科会発表については、視聴申込をすれば大会サイトで視聴できる。講演や分科会のスライドも掲載されている。大会冊子もAmazonで購入できる。大会サイトにリンクがあるので参照してほしい。

5. おわりに

来年度の第17回愛知大会は、リアル開催される予定である。コロナ禍で、研修や研究会の在り方も変化し、オンデマンド研修やクラウド上での教材の共有なども加速していきそうである。情報Iがスタートし、よりよい授業づくりのためには、全国の先生方の実践や研究を共有していくことが重要である。ぜひ大会サイトから、大会の成果を活用してほしい。

参考文献

- 1) 全国高等学校情報教育研究会, <https://www.zenkojoken.jp/>